

インド訪問 報告

2005年9月17日(土)～25日(日)

今回の参加者

大塚 公平, 木野 明裕
上月 直子, 西村 ゆり
花谷 めぐむ, 福井 保孝



9月18日 メタさん宅にて

登場人物

- ・BLP (ボンベイ・レプロシー・プロジェクト)
当事業のインド側パートナー
 - ・Dr.Metha (メタさん)
当事業のインドでの力強い後援者
 - ・川根 友・Kumar (クマル) さん夫妻
アーメダバードで識字教育等の NGO を主宰するご夫婦
 - ・Dr.Desikan (デシカンさん)
JALMA (アグラのハンセン病研究所) の初代インド人所長
 - ・Dr.Prabha (プラバさん)
デシカンさんのお嬢さん。すてきな女医さん
 - ・Sr.Joline (シスター・ジョリン)
セント・キャサリズ・ホームのエネルギッシュなシスター
 - ・フィアーナちゃん、ナイシャちゃん、アイゼンカちゃん
川根 友さんのお嬢さんたち
 - ・Divya (ディヴヤ) ちゃん
プラバさんのお嬢さん
- 他、たくさん子どもたち

9月17日(土) 関空発 (AI315) → 香港 → デリー → ムンバイ着

——ながいながいフライトのあと、やっとムンバイ空港に到着した一行は、早速、機内預けの荷物が出てこない！というアクシデントに見舞われた。おかげで迎えに来て下さっていた BLP とメタさんのドライバーを、深夜2時間も空港の外でお待たせすることになった。その夜は、空港近くのメタさんのお宅に泊まり、手厚いおもてなしを受けた——

9月18日(日)

<メタさん宅>

ダイヤルロック～トランクがひらかない！～

上月 直子

旅にハプニングはつきもの。スケジュールには何の影響も無いけれど、個人的には「えー、どうしよう！」が、インド初日に起こりました。

スーツケースのダイヤルロックが開かない。番号は間違いない！はずなのに何度やっても開かない。仕方なく 000～999 まで交替でやってももらったけどダメ。

次の朝(18日)早起きしてスーツケースを部屋から持ち出し、お手伝いさんに不審がられながら、再度地道な作業を繰り返したけどやっぱりだめ。叩いても踏んづけても蹴飛ばしても開かない。

お手伝いさんが開け放ったベランダの窓からは、ここはインドか？と信じられないほどの朝の涼やかな風が舞い込んでくるのに、はあ～、スーツケースが開かない…

ところが、朝食に出てきた木野さんがガガッとゆすったら、苦もなく開いたのです。

「開いた開いた！ありがとう。どうやったの？」どうも揺すり方がよかったみたい。木野さん、お見事。〈ロックする→開かない→木野さんがガガッと開いた〉をもう1回やって、福井さんがロックの穴をのぞいて、開かない原因を突き止めてくれました。「番号をずらすとつめが微妙に引っかかって開かなくなるから、もうダイヤルには触らないこと。」さすが福井さん、完璧な観察・分析。お見事。移動の途中でダイヤルがずれてもいけないので、バンドエイドでダイヤル部分を固定して、これで安心。

開きたい時に開けられる幸せ。当たり前前なのが当たり前前にできる幸せ。旅の初日から皆さんにお世話になりました。木野さん、福井さん、本当にありがとう！

インドに来て2日目。メタさんのお宅から、午後、ムンバイ随一の観光スポット、タージマハールホテル・インド門のすぐ傍にあるリージェントホテルに移動した私たち。早速、それぞれ周辺の散策にでかけ、各自がいろいろなインドの人とのふれあいを体験したのだった。

夕方、1人でホテルを出ると、1人の女の子が寄ってきた。脇には子分のような男の子。アジールだったか、そんな名前。(名前だけはヒンディー語で訊けるので、いつもまず質問するのだ) 12歳だという。

「あなた、ムービースターのようにきれいだわ」と言われ、この子のお世辞のすばさに唖然とする。達者な英語で、何とか私からお金をもらおうという下心が見え見え。こちらも意地になり、「お金をあげておしまい」にしたくなくて、いろいろなことを質問する。「学校行ってる?」「行ってるわ」

両手にアジールと男の子がぶら下がるような格好で、3人で手をつないで町を散歩。思い切って言ってみた。

「あなたたち賢そう。勉強したくない?」なーんと唐突! スラムで教室事業を始めた以上、この子らを「ストリートチルドレン」という“風景”として見たくない、気持ちが知りたいと強く思ったのだが、会話として成り立たず。(当然) それなのに、この2人、わたしがお金もあげず、わけのわからないことを言うにもかかわらず、なぜか非常に楽しそうにまわりついて、何を言われてもおかしそうに笑っている。「夜10時にホテルの前にいらっしゃい。日本から持ってきたものがあるの」と言うと、やっと2人は私から離れていった。「夜そんな時間に来るとしたら学校には行ってないということだな。きっと来るんだろうな」と思った。

22:00、BLPのガナパティさん、パイさんとの話し合いを終え、お隣のタージマハールホテルからリージェントホテルに戻る。アジール待ち構えている。

部屋に戻って、急いで鉛筆など、日本の人からの贈り物の一部(教室の子どもにといただいたものだが、かなりの量なので、申し訳ないけれど独断で路上の子どもにも使わせていただくことにする。下さった方、どうかご理解ください)、そして、折り紙、コンサートで使う予定の大きな絵などを持って外に出る。

予想したことだが、アジールは、たくさんの子どもをリージェントホテルの前の路上に集結させていた。なかには、まだ赤ちゃんのような幼児もいる。この子は頼りがいのあるボス、小さい姉御なのだ。

福井さん、木野さん、大塚君が助けに出てきてくれた。でも、ここでギター弾いたり、ダンスを踊ったりする勇気はないとのこと。そりゃそうだ。…で、おかしな日本人4人、インドのおっさんたちにも取り囲まれつつひととき路上ロンパールーム(古っ)を開設したのだった。

紙飛行機を道にばらまき、大きな「象さん」の絵を見せて歌い、アジールにインドの歌をせがみ、(彼女はとても上手に映画の歌を歌った。歌ったらお金がもらえる—そんな気持ちも見えたが…) 鉛筆のおみやげだけで、子どもたちは、夜遅い時間、クリスマスのようにはしゃいでいた。

アジールの表情に変化が現れた。陰しさが薄れ、お金という言葉が消えた。

「ママ」彼女は私をそう呼んだ。これが、戦略だったとしてもかまわない。自分の耳から、イヤリングを外して、別れ際に彼女の手押し込んでいた。赤いガラスの薔薇の形のそれを、アジールは本当に喜んだ。女の子やもんね。よかったね。

9月19日(月)

<アクウォース病院> 「光の教室」の子どもたちとのコンサート

大塚 公平

インドでの3日目、光の音符が運営している「光の教室」の視察をかねて、この教室のあるアクウォースハンセン病院の集会場でミニコンサートを行いました。

私の特技はブレイクダンスです。私は、インドの子どもたちにブレイクダンスを見て、楽しんでもらい、興味を持った子どもがいれば、ブレイクダンスをレクチャーしようと思っていました。

現場に到着したものの、子どもたちの姿は見当たりませんでした。「コンサートに来る子どもがいなかったらどうしよう?」と少し不安な気持ちのままコンサートの準備にとりかかりました。

しかし音楽をかけ、ダンスのウォーミングアップを始めています。音楽に惹かれたように少しずつ子どもたちが集まってきました。子どもたちは踊っている私をまるでサーカスをみるように、驚いた様子で見っていました。

そうこうしている内にコンサートが始まりました。子どもたちもたくさん集まり、とても楽しそうにこちらの様子を見していました。光の音符のメンバーも様々な特技をもって子どもたちを楽しませました。そして私の出番になり、精一杯だ

ンスを踊りました。インドでダンスというものはとても人気のある娯楽のひとつであり、そのためかとても喜んでくれて、大盛況でした。私はそんな子どもたちをみてとてもうれしくなりました。コンサートが終わっても子どもたちの熱は冷めず、再度踊りを要求されました。期待に答えるべくダンスを踊っていると、子どもたちも私と一緒に踊り始めました。

言葉は通じなくてもダンスを共に踊ることで気持ちを共有でき、とても楽しかったです。

当初の目的であったダンスのレクチャーも子どもたちは積極的にうけてくれました。少しの時間しかとれなかったのですが、しっかりと学んでくれたと思います。

最後に子どもたちがコンサートの御礼にと、インドの歌や踊りを披露してくれました。とても可愛かったのが印象に残っています。少しの時間しか子どもたちと一緒に居られなかったのですが、とてもいい体験をしたと思います。そしてこれからもあの子どもたちが元気でいてほしいと思っています。



コンサート終了後、BLPのスタッフ、シスターと



年長の子どもたちに大人気の塚公平

おしゃまなダンスを披露してくれました



<バザール>

アジール その2

西村 ゆり

夜、大塚君を除く5人で、バザールにでかけ、人ごみのなかで、またアジールと子分?の男の子に会う。彼らは、偶然私を見つけたのではない。動物的勘の鋭さで私を探し当てたのだ。

アジールとの会話が成立し始める。「将来何になりたいの?」答えはちょっと衝撃だった。私の左手の指輪をさして、「これがほしいの」「この子には、なにかになれる将来なんて、想像しようがないのか…」

あとで、私のお粗末な英語の発音のせいかと思ひ当たる。wantしか聞き取れなかったのかも。それでも、言っていましたよ。「あなたにはきっとチャンスがある。いつか日本に行くことだって出来る。私でできることする。」

残酷な嘘になるかどうか、私次第だと思う。「来年この時期に、またリージェントホテルに泊まるから来てくれる?」と訊くと、アジールは大きな声でYES!!と言ってくれた。

インドという国は、日本の常識や価値観を一旦白紙にしないととても捉えきれない。行く回数が増えるほど、ますます分からなくなる厄介な国だ。貧しさから生じる児童就労の問題は、豊かになれば解消してめでたしめでたし、というものでもないと思えてくる。(22日の報告にもあるが、ポーパールでアメリカの企業が起こした大事故の例からもそう思う。個人や企業が、自分たちだけの「豊かさ」を追求するとろくなことはない)

ここで、私たちがしようとしていることが、どういうことなのか。いい仕事を見つけ、買いたいものを買うために「教育」という武器を与えるだけではないはず。でも、日本人の勝手な思い込みで、心の教育なんてできっこない。「教室事業」のやりかたが、正直、まだ全然見えない。

現地の人、子どもと、ひとりひとりふれあい、そこで感じ、考える機会を重ねて、祈りながら進めていくしかないと思った。(誰かを助けられるか否か、それが当人の本当の助けになるかどうか、それは、そうしたいといくら思っても、人にはわからない) …と、さまざまなことを感じ、考えこみながら、やっぱり「豊かな」日本人として、私が「貧しい」子どもにインドで出来たことは、物を介しての一瞬の交流でしかなかった。それでも、アジールと会えて、本当にうれしかった。

9月20日(火)

<眼鏡屋通り>

めがね

上月 直子

やっちゃいました。ベッドの上のめがねをひざで踏んづけた。ねじれがひどくて手ではなかなか元に戻せない。これ以上やって壊しては元も子もないので、インドの眼鏡屋さんで直してもらおうと、ホテルのフロントで地図と目印を描いてもらって、花谷さんといざ出発。思ったより遠かったけど、めがねの絵の看板を見つけて喜んだ。のもつかの間、修理のできるおじさんは月曜日にならないと戻ってこないって。えー…

別の眼鏡屋を聞いたら近くにあるって言うので、じゃーそこへ行こうと歩き始めた。見当たらないなあともう一度聞いたら、「ほんのそこ。2分ほど。」ということで歩いていくと、どこにも眼鏡店はなくて、そこは露店の眼鏡屋通り、5、6店の眼鏡さんが歩道に店を連ねていたのです。なるほどね、これも眼鏡屋さんだわ、間違いない。でも、修理をお願いするのはちょっと無理かも…

私はすっかり納得して帰りかけたんだけど、花谷さんが「せっかく来たんだから頼んでみない?」と言って、めがねを渡してみると、お店のお兄さんは「いいよ。」とばかりに、向いの少年に小さなケースを持ってこさせ、中から眼鏡用のドライバーを取り出して、右手の小指を立て、それはそれは用心深く丁寧にねじを締めてくれたのです。直してもらえそう!と喜ぶのは…早かった。「修理はこれで終わったよ。」みたいなので、「ここも直して」とつるのねじれを指差すと、私のめがねのレンズを確かめて、ケース入りの新しいめがねをすすめられた。「どうもありがとう。」と私のめがねを受け取って、2人で顔を見合わせた。

なんていいお兄さんなんだろう。もしかしたらお兄さんは始めから、ひどくひん曲がった私のめがねは下手にいじらないほうがいいと思ったかもしれない。でもムンバイではあまり見かけない顔の異国のおばちゃんが頼むもんだから、むげには断らずに誠意を持って対応してくれたのかも。やさしいなあ。思い出すたびに心がやわらかくなります。

それにしても花谷さん、一緒に来てくださってありがとう。あの一言がなかったら、こんな素敵な思い出は得られなかったと思います。旅の思い出は、こんなのがわたしのお気に入りです。



<ムンバイ空港>

飛行機の席がない!?

花谷 めぐむ

ムンバイに着いて以来小さな事件はあったものの、すこぶる順調にスケジュールがこなせていた。まさか、こんなことが起こるとは!

20日は、当初の予定では夕方にムンバイからボーパールに飛行機で飛び、そのまま夜の9時からコンサートを行うはずだった。ボーパールでは、西村さんのお父さん(故:西占貢博士)と一緒にJALMA設立に多大な力を発揮して下さったデンカンさんの娘さんプラバさんがすべての準備を整えて待っていて下さる。ホテルを出るときには、プラバさんに電話をして、これから飛行場に向かうのでよろしくお願ひしますと伝えていた。

さて、ムンバイの国内線飛行場に到着し、チェックインをしようとした時、係官が「No name…」と独り言を言うのが聞こえた。まさかと思って待っていると、1番端にあるカウンターに行けという。そこで伝えられたのは衝撃の事実。

飛行機の座席が予約されていないというのだ!まさか!?ちゃんとお金も支払い、手元には正規の航空券がある。ここにチケットがあるじゃないと言うと、確かにお金が支払われたという記録は残っているが、日本の旅行社が飛行機の座席を予約するのを忘れたのだという。確認してもらおうと、なんと国内線4便(ボーパール往復とアーメダバード往復)すべてに予約が入っていない!ええええ、そんな馬鹿な?今晚ボーパールでは皆さんが準備万端整えて待っていて下さる。どうしても、今晚ボーパールに飛ばなくては!

ところが、ボーパール行きの飛行機は1日1便。しかも50人乗りのプロペラ機。予約が一杯で、1人2人なら運が良ければキャンセル待ちで乗れるかもしれないが、6人は不可能だという。どうしてもボーパールに行きたければ、インドール行きの飛行機に乗って、そこから車で4時間夜道を走るという手もあるが、それでも着くのは真夜中。ここで粘ってみるが、いかんともしがたく、次の手を考えるしかない。ボーパール行きの飛行機は翌日も予約が一杯で、6人全員の予約が取れるのが2日後だという。

まず、ボーパールのプラバさんに電話をして事情を説明する。当然ながら、プラバさんは言葉を失った。今晚飛ぶこと

は無理、インドールから走って夜中にボーパールに着いても間に合わない。しかし、今回の旅の大きな目的の1つはボーパールでコンサートをすること。プラバさんに会って、ボーパールの方々に私たちのコンサートを楽しんでいただき、コンサートの中で「光の教室」の趣旨説明をし、上月先生には姫路の小学生とムンバイの子どもたちの交流についても講演をしていただく。どうしてもボーパールに行きたい旨を伝え、残された策は2日後にコンサートを延期してもらうことしかないと伝えた。

プラバさんは、快く（というかそれしか道は無かったのだけど）延期を承諾して下さった。言葉で言うのは簡単だが、これは大変なことである。後で判明したのだが、コンサートには100人以上の人が来て下さっていた。これだけの人たちに突然のキャンセルを伝え、会場の手配をやり直し、個人的にはプラバさんのご主人及びお父様、デシカンさんの飛行機のチケットも日にち変更を余儀なくされた。多大な迷惑をかけることになってしまい、心苦しく思うと同時に、急な予定変更にも関わらずそれに応じて動いて下さる融通の利きやすさ、懐の大きさに感動する。

さて、ボーパール行きが2日後になったということは、当初の予定のアーメダバード行きをずらさないといけないということである。カウンターでは、（陸上選手の）ジョイナーに似た係官のお姉さんが、必死の形相で立ちすくむ6人を目の前にしながら、こちらの出方をうかがっている。即座に決めなければならない。当初の予定のボーパール行きとアーメダバード行きを入れ替える方向で話を進めることにする。アーメダバードには、1日4便飛行機が飛んでいる上にジェット機であるため、今なら夜7時の便で席を押さえることが可能だという。アーメダバードの川根さんに電話をして、事情を説明し、これからアーメダバードに飛ぶこと、川根さんをお願いしていたホテルの予約変更など手配をお願いする。川根さんも急な予定変更にも関わらず、快く応じて下さり、その日のホテルの手配及び、自分は仕事があって迎えには行けないがホテルから送迎を頼んだ旨を伝えて下さる。本当に、インドに住む方々の懐の大きさに感動する。

結果としては、20日はそのまま夜にアーメダバードに飛び宿泊、21日アーメダバードからムンバイへ帰って空港近くのホテルに宿泊、22日夕方ボーパールに飛んでコンサート開催、23日ボーパールからムンバイに帰ることが決まった。

幸いなことに21日晚のホテルは当初の予定のままで利用できる。だが、23日の夜に泊まるころの当てはない。21日に泊まる際にホテルで、23日の予約ができるかを聞いてみることにする。

この日以降、飛行場での待ち時間はうなぎのぼり。ムンバイは、モンスーン明けが遅れてものすごい雨が降り続いていた（21、22日は空港近くの道が冠水するほど）。飛行機は遅れに遅れ、アーメダバードからムンバイに向かう飛行機は3時間以上遅れた上に、雷までが飛行機に落ちた。ボーパール行きの飛行機も揺れること揺れること。夕方の便に乗ることが多かったため、夕食はほとんどが機内食。ゆっくり夕食を楽しむこともままならなかった。

だが、突然降ってわいたトラブルにも関わらず、路頭に迷うことなく当初の予定をこなせたこと、6人全員無事に日本に帰れたこと、何よりもインドの懐の大きさに触れられたことが大きな幸이었다と思う。帰国後、川根さんからのメールで、当初アーメダバードに着く予定だった日は、死者が出るほどの大水でアーメダバード市内が水没したことを知らされた。飛行機の便数も半分に減らされたという。もしかしたら、このトラブルも天の配剤だったのかもしれない

——予定を変更して2日早くアーメダバードに入った一行は、翌朝、この地で長く活動を続けている川根友さんとご主人のクマル氏、3人のかわいいお嬢さんたちと楽しい時間を過ごした。前日の空港での大活躍で、花谷めぐむはお腹を壊しホテルで休養。よって、クマル氏の魂のこもったお話は、以下福井と西村が必死で聞き取ることとなった——

9月21日（水）

アーメダバード

<川根友さん宅>

What should I do in this life ?

福井 保孝

クマル氏。川根さんから「夫です。」と紹介されたその人は、なんとも不思議な魅力のある「茶髪の紳士」でした。穏やかでゆったりとした、どこか宗教者のような雰囲気もある方で、ご自身の経験や信念を話してくださいました。私は、氏から聞いた示唆に富む話をここに紹介したいと思うのですが、私の貧しい英語力と英語と日本語の入り混じったきたないメモから思い起こそうとすると、話題のつながりがどうにもはっきりしないところがあります。「この話の次になんでこの話題が出てきたのか」今となっては思い出せないところもあり、特に印象に残ったことの羅列になるかと思いますが、その点をご容赦ください。

●必要なものは向こうからやってきてくれる

クマル氏は、1982年から86年にかけて、ヨーロッパからアメリカ、そして日本（ゴールは広島）へと17,000kmにも及ぶピースウォークをされました。

その折のチェコでの出来事。ハイウェイに沿った道を途中で知り合った少年とともに歩いている時、どうにも咽が渇いて仕方なくなったのだけれども水が無い。レストランを示す標識を見つけその方向へ歩いていったが、気がつくやうに途中で曲がるべきだった所をとうに過ぎていた…。そんな時、ハイウェイに大型トラックが停車し、運転手が彼らのところへ。その運転手はTVでクマル氏のことを見て知っていたということで、飲み物を持って来てくれ、「何かあったら連絡を」と連絡先まで教えてくれたとのこと。

氏曰く、「必要なものは向こうからやってきてくれる」、「Believe kindness」…（自分の行動にしっかりした信念があるからこそ発せられた言葉なのでしょう）

●政府は HIV に力を入れているが…

インド政府は HIV の対策には力をいれ、そのためのプロジェクトには資金の援助も随分行っているようだ。しかし、農村地域などでは今なおマラリア、はしか、結核などで命を失う人も多く、こうした問題も看過できない。

●患者を施設に収容することにおける問題点

HIV でも leprosy でも、患者を施設に集めれば、医学的な治療やケア・リハビリが出来、住むところを提供でき、子どもたちに教育の機会を与えることが出来る。しかし、そこを出たらどうなるのか？ 特に子どもたち（の教育）には光が当たらない。

治療やリハビリとともに、職業訓練（仕事に就くための技術）や子どもたちへのサポート、そして社会の人々を啓蒙することが必要になる。

●この人生で何をすべきか

クマル氏が、「自分はどう生きるのか」を考え始めたのはまだ少年のころ。哲学書や宗教書、偉人伝などをたくさん読み、その中で誰もが関わる3つの大きな問題があることに気づいたそうです。その3つとは…

1. 何故私は生れたのか？
2. この人生で私は何をすべきか？
3. ここから私はどこへ行くのか？（この一生の後に何かあるのか）

氏曰く、…この中で、私が解答できるのは2番だけ。残りの2つは意味が無い。私は私の心が本当にしたいと欲することをするにしました。それで、金儲けの出来る仕事をするのではなく、今の活動を始めたのだということです。（こんな話だけでは、氏が何か宗教の教祖様みたいな印象になってしまいますが、現実をしっかり見て把握し、何が必要か、何をなすべきかを冷静に分析して判断する力を持っておられるからこそ現在のような活動を続けていけるのだと思います。）

すでに走り出している「光の教室」。正直なところ、私自身、この活動がどのように今後展開していくべきなのかよく判りません。解決すべきたくさん問題・課題がありますし、まったく見えていないところもきっとあります。しかし、クマル氏のお話を聞いた後、早急な結果を求めずに、ただわが心の欲することを少しずつでも継続してやっていければいいかなと考えています。大きなことは出来なくても、あの子どもたちがささやかでも学ぶ喜び・知る喜びを感じてくれたなら、いいのではないかと……。その積み重ねの中で、きっと将来、自分たちの暮らしのことを、自分たちの国のことをしっかりと考えていくことのできる青少年が育ってきてくれると思います。

最後の最後に、クマル氏の言葉をもうひとつ。“Music has no language, no country.”

インドの子どもたちと関わるために、やはり音楽は欠かせません。自分の音楽性や技術をもっと磨かねば…と考えています。

—川根さん一家との団らんの後、川根さんの上の2人のお嬢さんの案内で、ガンジーのアシュラム（修行場）を見学。夕方空港へ。飛行機が3時間遅れ、大雨のムンバイに戻った一行は、真夜中、疲れ果ててホリデー・インにたどり着いた。このホテル、一見豪華な高級ホテルだが、中のスタッフは、かなりインド的というか、はっきり言って、とても変わっていた—

9月22日（木）

ムンバイ

<ホリデー・イン>

忙中の閑（バーデビュー予兆）

西村 ゆり

朝、相変わらず「また洪水か？」と不安になるような雨。メンバーは、チケットトラブルのショックもまだ大きく、この旅を無理に続けることに少し疑問も感じているよう。本当に無理もない。今晚私たちは、また移動。ポーパールに着いたら、すぐコンサートを予定なのだ。

この雨で飛行機が飛ぶのか？ボーパールにたどり着けても、飛行機が遅れた場合にコンサートが出来るのか？そこまでクリアできて、明日中にまたムンバイのこのホテルに戻ってこられるのか？ムンバイーボーパール間の飛行機は1日1便。あっちを午後8時発だから、あさってでは、夜8時25分ムンバイ発の関空行きエア・インディアには乗れない。日本に帰れないよ～

それでも、花谷さんと私は、行くしかないと思っていた。食欲もないというあとのメンバーをロビーに残し、神経が丸太のように太い2人、ホテルのレストランでランチ。久しぶりの砂糖の入っていない「普通」のコーヒー、バスケットに山盛りのデニッシュやクロワッサン、スープにほくほくしていたら、スタッフのおじさんが、つかつかと私たちのテーブルにやってきた。「おまえら、楽団やろ」（と、大阪弁で言ったわけではないが、そんな口調だった）「ここのバーで演奏してみい」木野さんのギターケース、福井さんのマンドリンと三線のケース、なにより年齢層ばらばら、意味不明の日本人一行は目立っていたのだ。

「是非やらせて」私は、いつものように即座に考えもせず答えてしまう。まあ、冗談か本気か、半々だな。でも実現したら素敵…花谷さんは「わあ、ホリデーインデビュー!!すごい」と笑ったのだった。

——その日の夜、不安いっぱいのまま思い切ってボーパール行きのプロペラ機に乗り込んだ一行は……

ムンバイ → ボーパール

<ボーパールの病院>

メインコンサート

花谷 めぐむ

夜8時、ようやく降り立ったボーパールの飛行場。プラバさん（細菌学）のご主人（心臓医）が迎えに来て下さっていた。さて、これから1時間後今回の旅のメインイベント、ボーパールでのコンサートが始まる。

ここで、なぜ私たちがボーパールにいるか、もちろん西村さんとプラバさんの旧交のおかげなのであるが、その背景について少し説明しておかなければならない。ボーパールでお世話になった施設は、とても大きな敷地を備えた大病院である。ここボーパールは、実は世界的に非常に有名な場所なのだ。1984年にユニオンカーバイド社（米国系外国資本）が起こした世界最悪の化学工場事故。猛毒のイソシアン酸メチルが63トンも大気中に放出され、後遺症で亡くなった人を合わせると1万6千人から3万人もの人が死亡した大事故である。この事故、補償もまた刑事責任も曖昧なまま（責任者は逃亡）で多くの課題が残されているのだが、この事故をきっかけに「基金」が設立されて、ここボーパールに大きな病院（大学を併設）が建設された。私たちのコンサートは、この病院の敷地内にある音楽堂で行われた。

会場に着くと、異様な熱気に圧倒される。コンサートって言ったって、まさかホールを埋め尽くし立ち見まで出るような人数が集まるとは予想していなかった。ざっと見ると100人以上が集まっており、子どもの数が多い。いきなり、心臓が踊り出す。

時間が切迫していたことと、会場にお客さんが既に入っていたことから、リハーサルの時間は取れない。できたらテープの音が出るかどうかだけでもチェックしておきたかったが、それもできなかった。

すぐにコンサートが始まった。日本ではコンサート終了時にキャストの紹介やら花束贈呈が行われるが、インドでは最初に花束贈呈をするらしい。プラバさんから、メンバーを紹介してくれと言われ、急遽、全員（このとき上月先生は音響室に待機して下さっていたので舞台には出られなかった）のメンバー紹介と花束贈呈を行った。

続いて、コンサートの開始。最初に挨拶、そして何よりもコンサートが2日間延期になったことについて謝罪を行う。次に、西村さんとプラバさんとの関わりを説明。西村さんのお父さん（故：西占貢博士）と一緒にJALMA設立に多大な力を発揮して下さったデンカンさんも会場に駆けつけて下さっている。すべての準備を整えて下さったプラバさんに謝意を伝える。実を言うと、日本でもこういうコンサートの進行役（司会）をやったことはない。いきなりインドで英語でやることになり、前半はつい台本に頼ってしまった。ところが台本に頼ると、今、どこまでしゃべったかが気になる。途中でようやく気が付いたのだが、大体しゃべることは頭に入っているのだから、少々文章が乱れたとしても、思い切って台本を外して話せばよいのだ。この発見は大きい。次回に生かそうと思った（自由に、時間的空間を埋められるところまではいくのは、まだまだ先だろうが）。

いよいよ、西村さんの歌が始まる。だが、テープの音が出ない。しびれを切らした西村さんはアカペラで歌い出す。うー、後から思えば、気の長いインド人のことだから少し待ってもらい、時間を取ってテープの音を出してもらうか、あるいは、カセットテープに切り替えるかすれば良かったと反省する。インドでは特に、自力で音を出すこと（カセットテープを利用）

を基本にすべきなのだろう。音響のおじさんとの顔合わせもうまくできておらず（コンサートの途中で、担当のおじさんがいて、専用マイクで指示をして下さっていたことが判明した）、最初に顔合わせ（舞台関係者）をする大切さも痛感した。

西村さんがまず「野ばら」を歌ったのだが、これはドイツ語。どのような歌詞なのか分からないため、西村さんが既に歌詞をかわいい絵本にして日本から持ってきていた。この絵本、モンスーン教室でのコンサートで、子どもたちにヒンディー語で説明して大好評だった。ここで、突然、舞台上の西村さんからヒンディー語で歌詞を説明してくれと呼ばれる。ええ？そんな台本にないで～と思ったが、後の祭り。舞台に出ていくしかない。大あわてで出て行き、拙いヒンディー語で一生懸命説明したのだが、これが会場に大いに受けた。子どもたちにも分かってもらえたようで、言葉のもつ力の大きさを実感した。

続いて西村さんが、「ローレイ」「庭の千草」を歌う。「庭の千草」は外国の曲でありながら、日本語に翻訳されたため、ほとんどの日本人が日本固有の歌だと信じている不思議な曲である。この曲の説明をして、次は本当に日本の歌である「ふるさと」を全員で歌う。「ふるさと」はテンポがゆっくりした歌のせいか、インド人には少し退屈に映るようだった。そのまま「Sukiyaki（上を向いて歩こう）」を歌う。この「Sukiyaki」、外国では有名な日本の歌のはずだったが、インド人には全くなじみがない（というより、1960年代の曲なので古すぎ？）ようで、これまた思うような反応が得られずに焦る。ここでようやくテープの音が出るようになったが、左右のバランス及び音量のバランスが悪すぎて歌えない。テープを途中で切ってもらい、少しばたばたしてしまった。

その次は、西洋のドレミ（ヒンディー語では、「サリガマパダニサ」という）との対比で、日本独特の旋律を知ってもらう。ここで、福井さんが登場。楽器のサンシンについて福井さんに紹介してもらい「島唄」を木野君が、福井さんが「安里屋ゆんた」を歌う。サンシンの弦の響きには「ゆらぎ」があるため、シタールなどの微妙な音を好むインド人には心地よく聞こえるようだ。

ここで、会場の聴衆が病院関係者だということ考を考慮にいれて、男性3人が看護師であること、24時間体制の病院で働いており、3交代（morning shift, evening shift, night shift）で働いていること、各人の病院についてアドリブで説明をしながら、木野君と大塚君を舞台に呼ぶ。

木野君の「日曜日よりの使者」、大塚君のブレイクダンスで、会場は大いに沸く。やはり若者のテンポのよさ、ダンスののりの良さは、万国共通らしい。

会場が沸いたところで、プラバの娘さんディヴィヤちゃんを呼ぶ。可愛らしい11歳。歌を披露してくれるということで、カーペンターズの「Yesterday once more」を歌ってくれる。インド舞踊もやっているとのことだが、これは準備（メイクアップと衣裳）に2時間もかかるそうで、次回のお楽しみということである。

ここで、ディヴィヤちゃん世代の先生ということで、日本の姫路の小学校の先生、上月先生を舞台に呼ぶ。先生が担任しておられた小学生とモンスーン教室の子どもたちは、去年、西村さんについて紹介された新聞記事をきっかけにして、国を超えた交流が行われていた。先生にとっては、初めての英語での講演。はっきりとした明るい声による講演で、インド人にはとてもわかりやすく、アピール性も大きかったようだ。

講演が終わった後に、日本の子どもたちの歌を紹介するというので、「ぞうさん」と「チューリップ」を歌う。「ぞうさん」については、戦後すぐにネルー首相が日本にインド象を贈ったのをきっかけにこの歌が作られたこと等を説明。全員で1番を歌ったあと、「ヒンディー語翻訳バージョン」を1人で歌った（歌手デビューしてしまった）。ここでも、会場の子どもたちが喜んでくれたようで、会場がどっと沸いた。チューリップでは、ハンドベルを持って歌ったのだが、西村さんが会場の子供たちにベルを持たせたら、プレゼントだと思われたらしく、ベルはとうとう戻って来なかった。もう少し、工夫が必要だったかもしれない。

最後に西村さんが、「光の教室」について説明をする。なぜ私たちがインドで活動を始めたか、現在の状況などをわかりやすく説明した。趣旨について、会場の方々には分かっていただけだと思う。

終わりに、「Sing」を歌い、その後、アンコール2曲（木野君の歌と大塚君のダンス）を行って、1時間余りのコンサートは無事終了した。

コンサート終了後、大塚君が若者たちに囲まれていたのは当然ながら、心理療法士だという女性、大学で医学を勉強中の学生など、いろいろな方々が話しに来てくれて嬉しかった。みんな口々に素晴らしかったと言ってきて、ずいぶんと割り引いて聞いてはいたものの素直に嬉しく、またありがたく思った。

途中で少しずつ書いたように、反省点はたくさんある。できるだけ時間を取ってリハーサルをすること、リハーサルができなくても打ち合わせをきちんとすること、それが望めない場合は、自力で音源を確保すること、これが第1点。

コンサートは生ものなので、どういう反応が返ってくるか、どういう歌が受けるかなどは、その場にならないと分からないし、またその時々変わってくるだろうから、場数を踏むしかない。今回は、会場の様子を見て、子どもたちが楽しめるようヒンディ語を所々に入れたのは、非常に良かったと思う。その点では、旅の前半にやったモンsoon教室でのコンサートが大いに役立った。

日本の音楽、インド人には少々退屈なところがあるのかもしれないと思ったが、日本の音楽を聴く機会が少ないのだから、その点は構わないのだろう。後半以降、若者たちが盛り上げてくれて、インド人も満足してくれたようで、非常に助かったと思った。

コンサート終了後、ゲストハウスに戻り、夜中の11時頃から遅いディナー。舞台でお世話になった技師さんなどが来て下さっていた。大塚君たちも地元の若者たちと情報交換し、ダンスを教えて楽しそうに歓談していた。食べ終わってほっとしたら、日付が変わっていた。長い長い1日が終わった。(余談:部屋に帰ると、部屋割りを巡って上月先生の珍提案があり、大笑いのうち楽しく床につくことができた)



ゲストハウス

9月23日(金)

<世界遺産 サーンチー> 「仏塔(ストゥーパ)」へのドライブ

上月直子

ポーパールでのコンサートの次の日、車で観光に出かけました。

ポーパールはとても小さな町で、少し走るとのどかな田園風景。と言いたいところですが、車窓に広がる畑地のように見えるところにはほとんど何も植えられていません。狭い土地にもちまちまと田や畑をつくりせせと耕作する日本人とは、きっと考え方が違うんでしょうね。

ドライブはかなりスリリングでした。道幅はゆったり2車線ほどはあるのですが、穴ぼこがひどくてまっすぐ走れません。運転手は巧みなハンドルさばきで調子よく80キロ、90キロとビュンビュンとばしてバスやトラックを追い越します。もとよりセンターラインなんて引いてなくて、対向車があってもすれ違うまではお互い穴ぼこを避けて道路の真ん中を走るもんだから、私は助手席でシートベルトを握りしめていましたよ。

インドでは、クラクションを鳴らすのはもしかしたら礼儀かもしれません。

「私通りますよー」「後ろから走ってきてますよー」「お先にいきますよー」と言う感じで、しょっちゅう、しかも長く鳴らすんです。トラックの後ろにはご丁寧に「プリーズ、ホーン(クラクション鳴らして)」って書いてあるんです。鳴らされた方も動じず、人も動物もあわてて道を譲ったりしません。日本と違って「ジャマだ」「気をつけろ」「ぼやぼやするな」なんていらだっているのではありませんからね、特にこんな田舎では。

汽車が走っていて、あれ止まっているみたいと見ていると遮断機が下りていて、バスが待っていました。と、私たちの車はバスの後ろではなく、右側に並んで遮断機の前で止まったのです。汽車はなかなかやってきません。男性達は車から降りて一服しました。ピーナツ売りがやってきてバスの窓から商売をしました。遮断機をくぐって行き来する人もいます。何分待ったでしょうか、ごっとなごっとなと汽車が通り過ぎて遮断機が上がると、またさっきまでのドライブが繰り返されました。そういえばインドではほとんど腕時計を見なかったなあ。



道の両側に集落やバザールがあるところには、犬、ヤギ、牛が悠然とくらししていました。珍しいところでは親子連れのイノシシも。牛が道の真ん中で用を足し始めると、車は牛が立ち去るまで待っていたりするのです。どうせクラクションを鳴らしてもどいてくれないしね。まだまだ色んな見飽きない光景があっただけ、やっとサーンチーに着きました。

車で丘をあがっていくとそこにストゥーパ群がありました。2000年も前に作られた美しい石組みが静かにありました。静かで涼しくて見晴らしがよくて穏やかなところでした。ちょうど9月末の季節が日本と似ていたのかもしれない。よく手入れされた花壇に小さな花が咲いていて気持ちのいいところでした。私はこんなところが好きだなあ。

サーンチー遺跡の後、訪れた「ウダイギリ」第5窟のシヴァ像

ボーパール → ムンバイ

<ホリデー・イン>

忙中の閑2 バーデビュー！

西村 ゆり

奇跡のように無事ボーパールでの大きなコンサートをやり終え、観光までしっかりして、深夜またムンバイのホリデー・インに戻れた私たちではあったが、前日の大仕事と、その日の山登りに近い観光、でこぼこ道の長時間ドライブで、体はくたくた。ホテルのチェックインに際しては、フロントのお兄さんの宿泊代前払いをめぐる「ずるこ」（関西弁です。ずるくてせこいことをすると言う意味です）にいらいら。

そんな状況でいたところに、22日にレストランで声をかけてきたおじさんがすごい勢いで走ってきた。「よう戻ってきた！すぐバーにいけ！歌え！」えーっと驚く。こんなときにまさか…

アセって「ちょっと待ってよ」と言っている間に、他のメンバーは、さっさと部屋に行ってしまった。とりあえず助けを求めに男性部屋の福井さんを訪ねるが、言下に「いやです！」と断られてしまった。そうだろうな。

エレベーターの前で木野さんに会い、事情を話すと、「わかりました！」この即答にも一抹の不安を感じる。

女性の部屋に行って「これからバーで歌ってくる」と宣言すると、花谷さんは、拍手して「すごーい。稼いできてね～」と言った。この反応には驚いた。

えらそうに言ったものの、1人バーのドアの前でびくびくする。「閉まってたらいいなあ」と思いながら押すと、開いてしまった。中には、歌手らしいきれいなお姉さんと、ギターを抱えたイタリア人っぽいお兄さん、それに件のおじさん、お酒を楽しんでいる西洋人3、4人が待ちかねていた。えらいことだ。でも仕方がない。

私はカラオケすらこの20年1回も行っていないのだ。歌えるのは、(下手だけど) ドイツリートとオラトリオの Aria、あとは、日本の唱歌…これ、インドのバーで歌う気か??? でも仕方なかった。音楽を介して人をつなぐのが光の音符。どんなチャンスもこれまで逃さない活動をしてきたではないか。がんばれ、と自分を励まし、なんとシューベルトの「野ばら」をそこにあったキーボードで弾き歌いした。

歌っているうちに泣けてきた。インド人が喜んでた！「もっとやれ」それで、英語で「庭の千草」を歌う。意味がわかるのでますます喜んでくれるみなさん。「楽しむ」ことにかけては天才的なインド人、小さい貧相な日本人の場違いな歌が面白いのかなあと思っていると、ギターを抱えて木野さんがやってきた。ほんとに来てくれたんだ！彼は、十八番の「日曜日よりの使者」を疲れたのどで、必死で歌った。(あまりの騒々しさに、ホテルのえらいさんらしい人がしかめ面でのぞきにきた。やめさせようとしたらしいが、中の状況を見て大目にみしてくれた) 続いて大塚君も来てくれて、じゅうたんという決定的に不利な条件のなかで、ブレイクダンスのポーズ。私は、若い2人の勇気に心の中で本当に感謝した。同時に、断った福井さんの見識にも共感した。

ひとそれぞれ。自分のやりかたで、皆インドで一生涯懸命なのだ。

おじさん「おまえ、もう1回歌え。歌わんと帰さんぞ」と言う。歌手らしい美人のお姉さん (Ivy- つた子ちゃん?と言っていた) もお客さんも、最後の「アヴェマリア」を、ハミングと一緒に歌ってくれた。

Ivyは、ムンバイでコンサートに出ないかと言った。有料のコンサートでギャラもでるとか…お客さんはムンバイの音楽好きの一般人だとか…「ありがとう。でも明日日本に帰るの」

おめでたい私はお世辞に踊っただけともいえる。でも、私は、素直にうれしかった。交流ということでは、(歌の質はともかく) インドでも日本と同じことが可能だと分かった。それで充分。というか思いがけないほどの収穫ではないか。

こちらのことを知りもせず、楽器のケースだけで、バー出演を依頼してきたいいかげんなおじさんに、心から感謝している。

9月24日 (土)

<セント・キャサリズ・ホーム> 看護師としてホームで学んだこと

大塚 公平

インド最終日、セント・キャサリズ・ホームを訪れました。ここは、HIVに感染した子ども、孤児、未婚の母の子ども、未成年の売春婦などを救助・収容している施設です。私がここを訪れるのは今回で2回目になります。

シスター・ジョリンに施設の案内や説明をしてもらいました。施設の説明を一通り受け、印象に残ったことは、ここに

いる子どもの数が大変多かったことです。これだけ多くの子どもたちが捨てられ酷い扱いを受けている状況を思うと、とても悲しい気持ちになりました。でも子ども達の表情は明るく楽しそうでした。それだけこの施設の教育や環境の質が高いのだと感じました。

施設見学終了後、シスターたちと食事をしながら話をしました。

私は精神科の看護師として、気になることがあり2つの質問をしました。

- ・まず1つ目は、子どもたちが施設から逃げ出すことはないのか？
- ・2つ目は HIV の症状が悪化し亡くなっていく子どもたちに対し、どのような心のケアを行なっているのか？

1つ目の質問に対しては、「子どもたちの外に出たいという欲求を解消するために、年に何度かバスなどで外出を行なっている。」また「抜け出す子どもたちは殆どいない。」とのことでした。私はこの施設の質や環境がよいから子ども達は抜け出すことはなく笑顔でいられるのだと思いました。



シスター・ジョリン

2つ目の質問に対しては、「子どもたちの友達が亡くなっていくのを見て、死に対する恐怖が強くなっていくため、その子らに対する配慮を充分におこなっている。」また「状態が悪化した子どもに対しては、宗教の教えや、決して苦しんで亡くならないことを何度も説明し、死に対する恐怖を和らげる。」と説明していただきました。

私はセント・キャサリズ・ホームを訪れ、看護師として、とても学びを受け、環境や看護の質が高ければ、どんな困難な目に遭った子どもからも、どんなに傷ついた女性からも、笑顔を引き出すことが可能であることを知りました。今後自分が看護を行なっていく上で、今回学んだことを生かしていきたいと思います。ありがとうございました。

9月24日(土) ムンバイ発 (AI314) → デリー → 香港 → 関空着 (25日)



大塚君、帰りの飛行機の中で仕事の書類を作成中。上月先生の添削を受けながら・・・

おつかれさまでした

皆様

本当にお疲れ様でした。サバイバル映画のようでしたね。
思い出すたび1人で笑ってしまいます。

…とはいえ、皆さんの命に関わることがあったら、と
実はひやひやでもありました。私だけならともかく…。
初めての上月先生、さすがです。ほんとにえらい旅行につれだして
しもたと思っていたので、今日メール見てうれしくなりました。
黄金メンバーだったのではないのでしょうか。

とにかく、大変面白い有意義な時間をこのメンバーで過ごせたこと
改めてよかったと思っています。

ほんとにほんとにお疲れ様。
皆さん、お体大切に。



みなさん、どうもお疲れ様でした。そして色々ありがとうございました。
今回2回めの、インド訪問。色々ありましたがどれも貴重な体験でした。
あらためてインドってすごい（色々な意味で）国だなあと感じました。

私は、飛行機の中で風邪をひいたらしく、家に着いたら既に38度の熱でした。
喉が痛い～(T.T)(T.T)。復活するまで、あと数日かかりそうです。

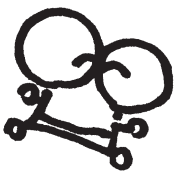
関空からそのままコーラスの会場に行って、歌まで歌いましたよん～。気圧のせいで耳が変だったので、自分の声が変わって聞こえて、うまく歌えませんでした。なんと「全国大会出場」が決まりました。まあ、めでたい(^◇^)

タクシー代が高くて、思わず負けろと言うわ、ドアは手で開けようとするわで、未だに日本に適應できておりません。

つらつら思い出すに、大変な旅でございました。やはりインドは一筋縄では行かない手強い国です。

まあでも、6人無事に日本に帰国できたので、今はホッとしている気持ちの方が大きいかな。

今日、明日からお仕事の方々、疲れがでませんように。



終わってみれば、あっという間の旅でしたね。
お1人お1人の特技や個性に触れて、すごい！おもしろい！いいなあ！の連続。
ええ旅やったなー。
皆さん本当にありがとう。